

身につけたい「力」の本質をとらえて、 子どもにかかわっていく



ベネッセ次世代育成研究所 顧問

磯部頼子

いそべ・よりこ

東京都足立区立大谷田幼稚園長、全国国立幼稚園長協会会長などを歴任。現在、ベネッセ次世代育成研究所顧問として幼児教育研究に携わる。

今回の調査では、卒園前後の子どもに対する保護者の思いが浮き彫りになりました。こうした母親の思いを、園はどのように受けとめ、日々の保育に取り組めばよいのでしょうか。ベネッセ次世代育成研究所の磯部頼子顧問がお話します。

「できるようになる」 この意味を考える

「読み聞かせ」のデータ（図1）から、保護者は子どもが文字を読めるようになる、「絵本は自分で読んでほしい」という思いをもつ傾向があるように感じました。

大人が読んであげることで、内容の理解を深めるだけでなく、言葉や文のもつリズムや読み手の気持ちが子どもの心に心地よく響き、次にひとりでするときに、その心地よさが思い起こされます。このような保護者の読み聞かせの意味を、園から発信することが大切だと思います。

「入学までに身につけておけばよかったと思うこと」のデータ（図3）を見ると、鉛筆の正しい持ち方を身

につけてほしいと思っている保護者が多くなっています。入学後、我が子が苦勞している姿を目の当たりにした結果ではないでしょうか。ひらがなは「とめ、はらい、はね」などを重視しており、正しく鉛筆を持つことが求められるからです。

鉛筆の持ち方は乳児期のスプーンの持ち方から始まります。なかなかうまくいかない時はスプーンから試してみるのもいいでしょう。保護者の気持ちとしては持ち方よりも「しっかり食べてほしい」「少しでも多くの文字を覚えてほしい」という気持ちの方が強いこともあるでしょう。ですから、園ではお弁当や給食の時、保育者が一人ひとりに合わせて気長に援助したり、鉛筆を使う機会に一人ひとりの様子を見てこまめ

に直していくことも必要になると思います。それにはまず保育者自身が正しく持てていることが大切です。園長先生はまず、自園の保育者自身が箸や鉛筆を正しく持てているかをチェックしてみたいはいかがでしょうか。

危険から身を守る力は 多様な体験から養われる

今回の調査では、年長児の保護者が、「安全な登下校」について高い関心をもっていることがわかりました（図2）。では、園にはどのような取り組みが求められるのでしょうか。

子どもが危険を予測したり、回避したりする能力は、すぐに身につくものではありません。園や家庭で多様な活動を経験しながら、徐々に身につく力です。そして、保育者や保護者が、一人ひとりの子どもの行動特性を踏まえながら、子ども自身が自分の行動を抑制したり、コントロールしたりする場面を意図的につくることも必要です。そのようにして、子どもに「こんなときはどうすればよかったと思う？」と問いかけて、自分の行動を振り返る機会をつくり、判断の基準が身についていくようにしていくことが大切です。

大人の指示がなくても、子どもが自分の体験をもとに「やってはいけないこと」「気をつけること」を判断できるようになるといいですね。

